教員によるエッセイコーナー

談話室

海外で広がる出会いとつながり

経済学部　教授　亀井憲樹（かめいけんじゅ）

私が慶應義塾大学で教え始めたのは２０２２年４月。２００６年秋に留学のため米国ブラウン大学に渡って以来、15年以上にわたり海外で研究・教育に携わってきました。専門は行動・実験経済学。実験室に現実の経済取引に近い状況を再現し、参加者の意思決定を観察することで、人々の行動の特徴を明らかにします。近年は、日常生活の中で行動の変化を測るフィールド実験にも取り組んでいます。

「人」を専門としているためか、運も良かったためか、海外では多くの出会いに恵まれました。こうした出会いは、現在でも私のかけがえのない財産です。私の最初の教員職は、オハイオ州ボーリング・グリーンにある州立大学でした。当時、ブラウン大学のプッタマン教授と長文のメールを毎日何通もやり取りして研究を議論し、さらにSkypeを用いた議論も毎週行ったのが良い思い出です。今でも共同研究を続ける間柄です。

オハイオ州在住時は、ミシガン大学アナーバー校のヤン・チェン教授にお世話になりました。２年半にわたり経済実験室を自分の実験室のように使わせていただき、グループミーティングにも温かく迎えてくださいました。片道１００キロ以上を車で何十回も訪問したことは、今でも良い思い出です。２０１５年からは英国ダラム大学で教鞭を執り、ヨーク大学のジョン・ヘイ教授にお世話になりました。実験室の優先利用など多大なご厚意をいただき、研究や雑談を交わす時間も非常に楽しいものでした。ヨークへの訪問は１００回を超えています。

こうした温かい方々に支えられ、日本に戻った現在も海外で出会った研究者と関わりながら研究を続けています。英国、米国、デンマーク、インド、モンゴル、トルコなどで、多くの外国人共著者と実験を行っています。海外に出ることで、多様な人々と出会う機会が生まれ、異なる文化や社会に触れることで新しい発想も生まれます。積極的に日本の外に出て新しいことを学び、出会ったつながりを大切にすることを、ぜひお勧めしたいと思います。

2019年のカナダでの実験経済学国際学会（中央のプッタマン教授や、友人とも再会）

2008年から親交のあるウィーン大学タイラン教授（左、2024年以降毎年慶應義塾訪問）